

# 大学生における自己愛と学校適応の関連に関する日中比較研究

学校教育学専攻  
 学校心理学コース  
 学籍番号 M09047i  
 氏名 楊 一晨\*

目的：本研究では、日本の研究成果を参考にし、中国の学校での生活環境や文化背景を踏まえて自己愛を検討することが本研究では第一の目的となった。そして、学校生活の中で自己愛が大生活への学適応にどのような影響を与えるのかという観点から、自己愛水準と学生の学校適応との関係について日中の間に検討することが本研究の第二の目的となった。

被調査者：本調査については兵庫県下のA大学に在籍する学部生 123 名および中国海南省B大学に在籍する中国大学生 184 名の総計 307 名が本研究に参加した。

材料：①自己愛傾向尺度：高橋（2006）によって構成された自己愛傾向尺度が 21 項目を用いられた。下位尺度は「対人過敏性」7 項目、「自己愛的な怒り」7 項目、「回避性傾向」7 項目からなっている。この尺度に対して 4 件法で回答が求められた。②学校適応感の尺度：吉田・鈴木・古川・浅川・東（2002）の FSA 項目の因子分析結果に基づいて、抽出された 28 項目からなる簡略版が使用された。回答形式「全くその通り」「かなりそう思う」「少しそう思う」「全くそう思わない」までの 4

件法で回答が求められた。

結果：両国大学生群の自己愛間の検討するために、2（国）×2（性）の 2 要因分散分析を行った（表 1 参照）。その結果は、両国間に有意差が認められなかった。

表 1 日中大学生群間の自己愛得点の平均値と SD

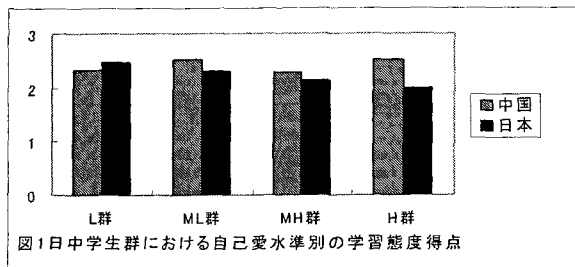
国別	性別	平均値	SD	N
中国人学生群	男性	50.01	11.67	75
	女性	49.04	9.74	109
日本人学生群	男性	49.55	8.53	44
	女性	49.91	9.75	79

自己愛水準に学校生活適応感尺度から得られた得点を各因子（ストレス反応・認知的他者評価・学習態度・友人関係・大学の授業満足感・教師関係）にまとめ（表 2 参照）。

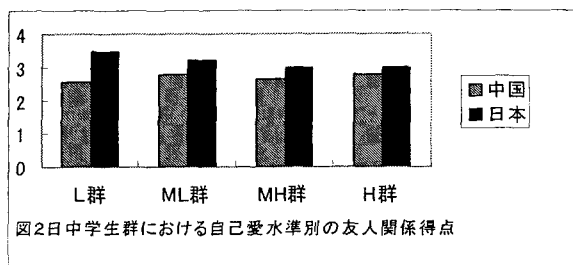
表 2 自己愛水準に大学適応因子の平均値と SD

自己愛水準	中国				日本			
	L群	M群	M群	H群	L群	M群	M群	H群
N	46	40	53	45	25	38	35	25
ストレス反応	1.89	2.36	2.47	2.71	1.94	2.45	2.77	3.05
認知的他者評価	0.71	0.67	0.67	0.65	0.69	0.59	0.62	0.68
学習態度	2.28	2.45	2.18	2.36	2.50	2.37	2.39	2.34
友人関係	0.66	0.50	0.53	0.61	0.56	0.48	0.46	0.61
大学の授業満足感	2.34	2.53	2.27	2.53	2.48	2.30	2.14	2.00
教師関係	0.71	0.57	0.47	0.66	0.62	0.53	0.58	0.73
上段:平均値	2.53	2.79	2.63	2.77	3.48	3.22	3.01	3.01
下段:標準偏差	0.72	0.49	0.50	0.54	0.48	0.43	0.48	0.48
	2.34	2.29	2.37	2.43	2.65	2.76	2.63	2.51
	0.58	0.52	0.47	0.68	0.48	0.41	0.60	0.62
	2.07	2.53	2.11	2.42	2.36	2.25	2.24	2.34
	0.92	0.66	0.95	1.01	0.80	0.55	0.68	0.80

次に、自己愛水準（L群、ML群、MH群、H群）と国（中国－日本）を独立変数として、学校適応の各下位尺度得点を従属変数として、2要因分散分析を行なった。「学習態度」においては自己愛水準と国の交互作用が有意 ( $F_{(3, 299)} = 3.36, p < .05$ ) であった（図1参考）。



「友人関係」において、また、自己愛水準と国の交互作用が有意 ( $F_{(3, 299)} = 5.59, p < .05$ ) であった（図2参考）。



「ストレス反応」において多重比較の結果はH群>MH群>ML群>L群順に得点が高かった。

「大学の授業満足感」において、国に単純主効果が見られ ( $F_{(1, 299)} = 18.52, p < .001$ ) 有意であった。

### 考察

①日中大学生自己愛傾向の検討について、有意差が認められなかった。この結果から、両国大学生群において自己愛が同じことが明らかになった。このことは、同じ少子化背景に繋がると考えることができる。

②両国とも自己愛が高い学生群ほど学校生活の中にストレスを強く感じていることが明らかとなった。この結果は、東紀・浅川・古川・

吉田(2002)にみられる結果と一致しており。

③「学習態度」において、日本人大学生群は自己愛得点が高いほど学習態度得点は低い。中国人大学生群は自己愛得点が高いほど学習態度得点は高い。これは、自己愛が脆弱であれば、授業のように自分が評価されるような傷つく可能性がある場面を回避しようとし、ひきこもりのような無気力状態を呈する可能性が考えられる

④「友人関係」について、日本人大学生群は自己愛得点が高いほど友人関係得点が低い、この結果は、東・浅川・古川・吉田(2002)の自己愛得点の高い群ほど対友人関係が高いとは異なるという見解を支持する結果であった。また、自己愛L群、LM群、MH群では、日中間に有意差が見られ、中国人大学生群より日本人大学生群は友人関係の得点が高く、この結果は、小塩(1998)は、「狭く深いつき合い方」は限定された友人関係と、互いを分かり合おうとするような友人関係のあり方である。

本研究では、日中大学生の自己愛得点には有意差が生じないことが明らかにした。そして、中国においても自己愛と学校適応の関連があることが示唆された。中国人の大学生は自己愛傾向が高い方は学習態度と友人関係に対して積極の影響を与えることが示唆された。このことから、大学生の学校生活適応を向上させるために、学校の教育方法や体制を整えるだけでなく、学生の個人の側面に着目する必要がある。また、日本、中国ともに、自己愛が大学生のストレス反応に繋がることが明らかにした。

主任指導教員 浅川 潔司  
指導教員 浅川 潔司